

日ソ 洗いざらい大討論

北方領土は返ってくるか

ソ連参戦 シベリア抑留 ヤルタ協定 “怨念のトゲ”を抜くには
まだ幾つものハードルを越えねばならない

◆ドミートリ・ペトロフ

(ソ連科学アカデミー極東研究所
日本問題研究部長)

◆コンスタンチン・サルキーソフ

(ソ連科学アカデミー東洋学研究所
日本部長)

◆中嶋 嶺 雄

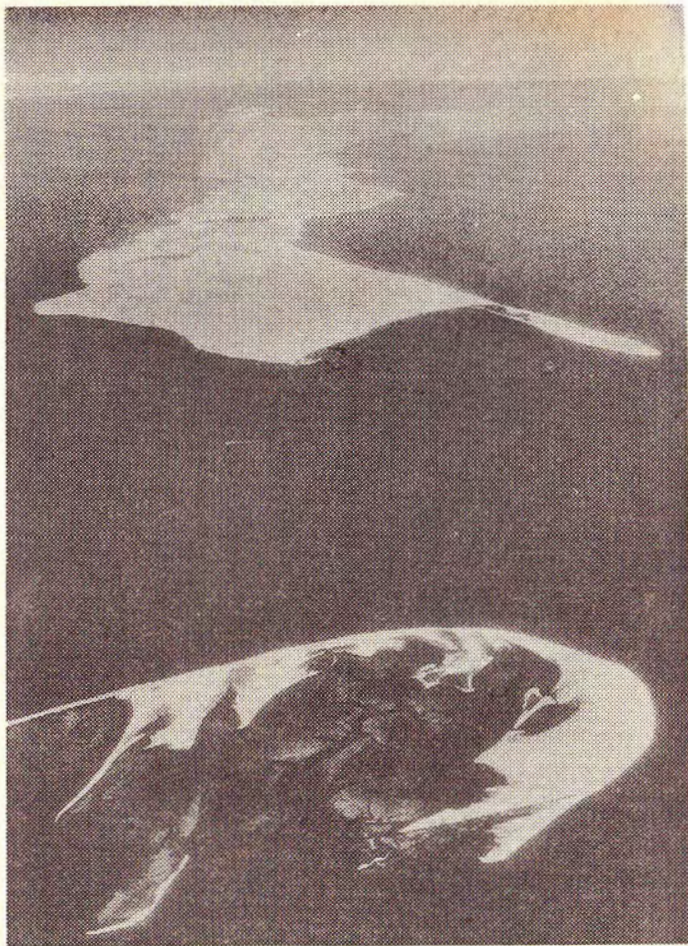
(東京外国語大学教授)

◆小島 敦

(読売新聞外報部次長)



討論する右から中嶋、サルキーソフ、ペトロフ各氏と
小島本社外報部次長



北方四島の一つ、国後島を望む(手前は北海道の野付半島)よみ
うり128号機から稲村健本社写真部員

◆壁崩壊とアジア

北方領土は返ってくるか

小島 マルタでの米ソ首脳会談で冷戦の終結宣言が出され、欧州が大きく変わろうとしている。だが、アジアでは、カシミア内戦が依然として続き、南北朝鮮の対立も解消の兆しを見せていない。

日ソ関係もヤコブレフ・ソ連共産党政治局員が昨年十一月に訪日するなど、ハイ・レベルの人的交流の動きはあるものの、大幅な改善はこれまでのところ見られなかった。そこで、こうした日ソ関係の現状をどう評価するか、というところから話を進めていただきたい。

ペトロフ まず言っておきたいのは、われわれは日ソ関係をグローバルな動きから切り離して考えてはいけない、ということだ。最近の世界の動きを見ると、ゴルバチョフ・ソ連最高会議議長のイタリア訪問、マルルーニー・カナダ首相の十八年ぶりの訪ソ、そしてマルタ・サミットという一連の出来事で、ソ連と西側の関係は大幅に改善された。こうしたイベントを無視して日ソ関係を語ってはいけない。

何故なら、第一はむろん冷戦が終わったということだ。第二に、軍事戦略的な面から見ると国際的に緊張が緩和され、さらに大切なことは相互の信頼関係が深まってきていることがある。第三に、イデオロギーの違いにもかかわらず、政治的、経済的関係を発展させられることが示された。そして第四に、米国が対ソ制裁をやめ、ソ連の国際金融機関への加入、例えば世銀やガット(関税と貿易に関する一般協定)などへの加入を支持するなど、政治面だけでなく、経済的にも関係が強化されようとしている。誠に一



ペトロフ氏

九八九年は世界の一大転換の年だったと言っ

ようした状況から見ると、アジア情勢は残念ながら欧州に比べずっと遅れている。そのアジアの中でも、日ソ関係は一段と遅れていると言わざるをえない。だが、われわれはヤコブレフ政治局員の訪日を非常に高く評価している。この訪日では具体的成果はあがらなかったが、このようなハイ・レベルのソ連の政治家が日本の指導者とひびぎを接して話し合ったという事実が大切なのであり、日ソを取り囲む雰囲気は一般的に言っ

てよくなっ

たし、今後の関係改善につながるもの、その基礎になるものと評価している。

サルキーソフ いま欧州で進んでいるきわめて建設的なプロセスを、いかにアジアの脈絡の中で生かすか、実効のあるものにすることが、アジアの国でもあるソ連とアジアの関係で重要な課題だと思

う。ソ連はこれまで、アジアに対しいろいろとイニシアチブをとってきたが、必ずしもアジアでは評判はよくなかった。今回、訪日して、日本の新聞を読んで、マルタ・サミットに対する日本の政界、マスコミの反応が非常に好意的であったことを喜んでいる。欧州でこのようなすばらしい事態が進んでいるのだから、アジアも是非——と言う声が出ている。これまでのようにソ連がイニシアチブをとるのでなく、アジアの国々がアジアでもデタントをやろう、と動き出してくれることを期待している。

日ソ関係について言うなら、ペトロフさんも言われたように、ヤコブレフ政治局員の訪日は(関係改善に)有効だったと考える。彼はベレストロイカ(立て直し)の思想家の中でも一番優秀な人物だし、柔軟な思考の持ち主だ。いまの日ソの立ち往生状態から抜け出す道をいろいろと探ったと思うが、彼が日本で言った

「第三の道」という表現を、私は大歓迎

する。これは党とか政府とかを代表して

いないあくまでも一学者としての私の解

釈なのだが、「第三の道」というのは、

第一の道がソ連の立場、ソ連の主張であ

り、第二の道は日本の立場、主張なのに

対し、お互いの立場、主張で突っ張って

いたのでは前進はないから、双方が受け

入れられる方式で難問解決に知恵をしぼ

ろう——と言うことだと考えている。ゴ

ルバチョフ議長

の訪日まであと一年余りあるが、この時期が日ソ関係で非常な決

定的転換期だと思う。この間、双方とも慎重で、お互いに傷つけないように配慮しつつ、関係改善を

実現するものにする必要がある。中嶋 いま、お二人から日ソ関係の重要性と、その関係が少しずつよくなっているとの指摘があったが、私は日ソ間の懸案が解決され、関係が非常に発展するまでには、まだまだいくつかのステップが必要だと思う。いまの欧州の激動をみると、最近の欧州情勢とゴルバチョフ議長

議論する場合、あの当時の状況を十分に考慮に入れなければならない。

日本兵が捕虜としてソ連に連行されたことも、戦争であった以上、やむをえなかったことだと考えている。しかし、彼らを長く抑留したことは、やはりスターリン時代の誤りであったと、われわれも考えている。終戦後、もっと早く帰還させるのが公正な措置だった。

◆サンフランシスコ条約

サルキーソフ ヤルタ協定の再評価、ということになりそうだが、ヤルタ協定というのはやはり戦争の産物であり、ソ連の対日参戦もある意味で仕方がなかったものと考えている。しかし、その後の日ソ関係がヤルタ協定をもとにいろいろ議論されてきているが、もっと別な視点があってもいい、と私は考える。例えばサンフランシスコ平和条約がある。この条約には、ソ連は非常に不幸なことに調印しなかった。それにはあの当時のきわめて特殊な状況があり、調印しなかったことまでスターリンの誤りだった、と私

は言いたくない。ただし、ソ連がもし調印していたなら、いまの日ソ関係はまったく違ったものとなっていただろう。

このサンフランシスコ条約で、日本はクリル（千島）列島の領有を放棄した。これは明確な歴史的事実だ。領土問題で日ソ論争は、四つの島をクリル列島に入れるかどうかにはばられているわけだが、私のごく個人的見解だが、日本の立場は非常に弱いし、疑問があると思う。『吉田茂回想録』を読めば明らかのように、サンフランシスコ条約では、四島はクリル列島に含まれない、ということとは明記されていない。吉田は、四島がクリルに含まれないことをぜひ明記するよう要請しているが、ダレス（元米国務長官）はこれを断っている。何故、米国は



サルキーソフ氏

明記しなかったのか。当時の米国には、それなりの戦略的な理由があったのだろう。

領土問題には、三つの側面があると思う。第一は、法律的側面だ。私はハボマイ（歯舞）、シコタン（色丹）はべつにしても、クナシリ（国後）、エトロフ（択捉）はクリル列島に属すると考えているが、日本の立場はまったく違う。だから、両国の専門家がテーブルについて、法律的に討議すべき問題だし、そう簡単に決着がつく側面ではない。

第二は、政治的側面だ。この問題が政治的には明確に存在しているのだから、ソ連もそのことは認めなければならぬ、と考えている。日本がこの問題を出してくる限り、政治的に存在しているものであり、軽視すべきではない。真剣に日本政府と話し合わねばならない。

第三は、心理的側面だ。いまは日ソ両国の間にお互い不信感があり、国境問題のような複雑な問題を討議する環境にはない。もっとお互いの信頼感を蓄積しつつ、話を進めていかなければならない。

◆ソ連参戦と抑留

小島 いま、心理的側面といわれたが、その意味でも、シベリア抑留日本兵の問題は、スターリン時代の対外政策の誤りの実例として、ソ連側でもっと真剣に考えるべきではないだろうか。

サルキーソフ そう。シベリア抑留問題は（領土問題とは）全然違うが、私にはこの問題についての日本国民の気持ちがよくわかるし、ソ連側に反省すべきところもあるだろう。ソ連の政府も学者も、この問題をもっと真剣に検討し、日本の対ソ信頼感の醸成に努めるべきだと考えている。

中嶋 サルキーソフさんが言われたように、北方領土の問題それ自体はヤルタ協定に発するのだが、たしかにこれは戦争の産物だ。また、サンフランシスコ条約についても、ソ連側にも言い分があるだろう。しかし、この条約は、日本側から言えば米国の占領政策の一環であった、日本に外交自主権のない状況下で締結されたということも、はっきりさせて



中嶋氏

おきたい。それに、当時、米国が北方領土問題の重要性をどこまで認識していたのか、ということも指摘しておきたい。もしも米国が、この点の重要性を承知の上で、問題をあとに残そうとしたのなら、それは米国が日ソ間にトゲを刺し込んでおいたことになり、一種の日ソ離間策と見なければならぬ。だからこそ、北方領土の問題はまさに政治的課題として、今後の日ソ間外交交渉にゆだねるべきだろう。

だが、シベリア抑留の問題は、いまも言われたように、ヤルタ協定とはまったく別個の問題だ。戦争が終わってからあの悲惨な状況が起こっているからだ。この問題については、昨秋の第六回日ソ円卓会議の席上でも、私は強調したつもり

だ。それに、シベリア抑留だけでなく、急きょソ満国境を越えて旧満州、いまの中国東北部に進攻してきたソ連軍の暴虐ぶりも、実はこれには日本の旧関東軍にも責任があったかもしれないのだが、日本人の心理に深刻な傷跡を残している。中国残留孤児の大きな原因もこれにあった。例えば、ポーランドの「カチンの森」の事件が、ソ連の東欧での大きなトゲの一つとなっているように、シベリア抑留問題は日ソ関係にとってまさに歴史的なトゲとなり、日本人の心理に非常に大きなカゲを落としていることを指摘しておきたい。このトゲを抜く努力は是非必要だ。ペトロフ、サルキーソフ両先生のような日本の事情に詳しい方々に大いに努力していただきたい。

小島 いま、ソ連のお二人の話を聞いていて、この問題が今後、ソ連国内で論議、検討されるだろうとの印象を受けたのだが……

ペトロフ それはそうだ。私はこの問題を専門に研究している人を知っているが、彼はきわめて真剣に抑留問題を検討

している。

中嶋 とにかく、日本人の反ソ感情のルーツは残念ながら非常に深い。それは単に北方領土の問題だけではなく、シベリア抑留、中国東北部でのソ連軍の暴虐といったものが語りつがれ、ソ連に対するかなりの反感となっている……

ペトロフ しかしね、これは複雑な問題です。何故かという、ソ連国民にもそれなりの感情がある。というのは、ソ連が日本軍と戦ったのは日本の領土ではなかった。もともとは中国と朝鮮の領土でだった。どうして日本軍がそこにいたのか。日本が侵略したからだ——というソ連人の考え方も考慮してもらいたい。仮にソ連が日本を侵略し、日本の領土で日本と戦い、日本兵を捕虜にしてソ連に連行したのだったら、まったく違ったイメージとなったかもしれない。

まあ、そうしたことは別にして、シベリア抑留の問題には人権という側面がある。いま、ソ連人は人権問題にきわめて敏感になっている。そして、その意味で、シベリア抑留も歴史にあった事実な

のだから、再検討しなければならない、ということだ。

小島 私の見るところでは、ソ連国内ではそうした問題で広く論議が行われてはいない。ソ連国民の大半は、日本人の反ソ感情の歴史的背景を知らない。そうした歴史的事実をソ連国民に知らせることは、日ソ関係改善のために必要なことだと考えます。では次に……

ペトロフ ちょっとこの問題についてつけ加えさせてほしい。抑留された人たちで現在まだ生存されている方々、あるいはその遺族の方々の感情を考えた場合、ソ連領にある抑留者の墓地をもっと整備清掃すると同時に、日本からもっと自由に墓参できるような状況をつくるのが大切だと、私たちは考えている。

サルキーソフ まったく同感です。

◆ 日米安保条約

小島 北方領土問題については、一九六〇年にグルムイコ書簡が出され、日米安保条約のからみで、ソ連は「日本から外国軍隊が撤退しない限り、南舞、色丹

の二島も返還しない」と声明した。これを、現在の国際情勢のもとでどう考えますか。

サルキーソフ これも非常に大きな問題だと思う。五六年の日ソ共同宣言の領土条項（ソ連は平和条約締結後、南舞、色丹を日本に引き渡す）の効用について、いまソ連には二つの意見がある。一つは、お互い批准した文書であっても、国際法上、部分的に修正できるというもの。もう一つは、それは無理で、修正するなら全文修正するべきだ、というものだ。私は国際法の専門家ではないし、まったくの個人的見解だが、後者、つまり修正は不可という考え方をしている。

小島 とにかく、国際情勢は大きく変わってきており、グルムイコ書簡の時代とは大きく違ってきているのだから……

サルキーソフ 確かに違ってきている。だから、あの書簡の中では日米軍事同盟が強く批判されているが、私は日米軍事同盟に対するソ連のこれまでの態度を再検討すべきではないか、と考えているし、そうした意見をソ連の雑誌にも書

いた。ペトロフ先生は賛成ではないかもしれないけど。

小島 最近、日本では、日米軍事同盟ではなく米ソ軍事同盟になってしまい、日本が孤立するのではないか、という意見まで出ているんですよ。（笑い）

サルキーソフ 日米摩擦が先鋭化しており、米ソ関係は緩和している。だから、日本では、これまでは米国の一番の敵はソ連だったが、いまは日本になった——とマスコミ的に騒がれている。これは一理あるんじゃないかという気がするね。（笑い）

中嶋 日米摩擦を安全保障の問題での危機としてソ連側が考えているとする、それは誇大視されていると思う。ただ、日米安保条約は集団保障体制をとるためのものだから、国際関係のいまの緊張緩和への方向の中で見直さなければならぬと思う。日米間の摩擦は深刻だと思いが、これが安全保障上の亀裂にはまだなっていない。

それから、ソ連の人たちと日ソ円卓会議などで意見を交わしてみると、グルム

イコ書簡のあの発想はソ連でも完全に過去のものになっている、という気がする。日米安保条約があっても、日ソ関係の改善には支障はないし、領土でも、まったく返還に応じないという態度は、ソ連側もとらなくなってきたと思う。その意味でも、グルムイコ外交は完全に過去のものになったのではないか。

ペトロフ 私は歴史家の立場から（グルムイコ書簡の引き金になった）一九六〇年の日米安保条約（改定）は、（内容的に）五一年の安保条約とほとんど同じ、と考えている。五一年の条約に基づき、米国はすでに日本国内に軍事基地を持つており、その軍事戦略的な状況は六〇年条約の時と変わっていないからだ。だからわれわれは、グルムイコ書簡ではなく、もっと広い意味での日ソ関係について、領土問題も含めて考えるべきだと思っています。

サルキーソフ 誤解のないよう言っておくが、私が日米軍事同盟に対するソ連の態度を再検討すべきだというのは、必ずしもこうした同盟がよいということでは



小島 次長

はない。こんなものはない方がいいに決まっている。だが、現実には日米軍事同盟は存在しているのだし、日本は独立国としてそういうものをどこでも結ぶ権利があるのだし、そして八〇年代は五〇年代、六〇年代と国際環境も変わってきているのだから、日米軍事同盟が存在することを認めた上で、お互いに緊張緩和の構想を進めるべきだ——ということだ。

◆ アファナシエフ発言

小島 北方領土問題については、この前日された歴史学者のユーリ・アファナシエフ氏が段階的の四島返還論を唱えて、日本でも話題を呼んだ。また、急逝されたアンドレイ・サハロフ博士も滞日中、「私は原則的に戦争で領土を拡大す

ることには反対であり、四島全部返還すべきだと思う。だが、現在、これら四島で生活しているソ連の人たちの人権問題を考えれば、即時返還はできない。日ソ間の妥協が必要だ」ということを言っていた。このように、ソ連にもいろいろな見解が出されているが、お二人の率直な考え方をうかがいたい。

中嶋 アファナシエフ発言は日本ではマスコミでかなりセンセーショナルに伝えられた。だが、アファナシエフ氏は必ずしも日ソ関係の専門家ではないし、むしろ専門家であるお二人の意見をうかがいたい。また、アファナシエフ氏はモスクワ古文書大学の学長として、歴史のペレストロイカにはかなりの影響力を持っておられると思うが、ソ連の政策決定にもあの発言が影響力を持つとみてよいのか。そこが知りたい。

ペトロフ 中嶋さん。私はアファナシエフ発言を全部読んではいないのだが、彼がいろいろ発言した中で、一回でもこれら四つの島々の名前を挙げたことがありましたか。

中嶋 そこが問題なんです。ペトロフ 名前は挙げてはいなかったでしょう。

中嶋 そう。アファナシエフ氏は確かに改革派の学者として思い切った発言をされるけれど、実はペトロフさんが言われたように、果たして彼が北方領土問題の歴史的経緯をご存知なのか、北方領土とは具体的にどの島で、どのような経緯があるかということまでは知らないのではないのか。そういう立場から大向こう受けするようなことを言われても、ある意味で空理空論なのではないか。われわれにはそういう不安があるものだから。

ペトロフ 私はね、領土問題は次のような前提に立って考えたらい、と思う。第一は、日ソ双方が相互に国益を考えに入れなければならないということだ。

第二は、領土問題を孤立した問題としてではなく、日ソ関係の中で総合的にとらえ、政治、文化、経済の諸問題と関連づけて考えることだ。

第三は、この問題はこれまでもいろいろと意見をぶつけ合ってきたが、今後は、と考えている。

はグラスノスチ（情報公開）の時代で、だれでも自由にものを言える。アファナシエフ発言は、彼がそう考えていたことを口に出したもので、個人の権利、言論の自由からして、それはそれでいいのではないか。

アファナシエフ発言には二つの側面があると思う。一つは、個人として自分の考えを自由に発言する権利がある、という面だ。だが、もう一つの側面、つまり中嶋先生が指摘されたように、彼は領土問題の専門家ではない、という面がある。そういう人が訪日して、大げさに「四島をぜひ返還すべきだ」といっても、政府や党を代表しているわけではないのだから、領土問題のようなデリケートで複雑な問題でこうした発言をされると、日本側も困惑するだろうし、ソ連側だって困る。私に言わせれば、四島即時全面返還、という日本の姿勢も極端だし、何も譲らないというソ連の態度もちょっと極端だと思うが、そうしたさなかのアファナシエフ氏のような大げさな発言は、慎重であるべき交渉のプロセスに害があ

お互いの面子を傷つけないようにすることだ。残念ながら、この問題には政治的なだけでなく、国家の威信といったものもかわってくる。何とか日ソ双方が、相手の顔をつぶさない方策を探らなければならない。

したがって第四に、この問題に対しては、日ソ双方が柔軟で妥協的な方向を模索することが必要だ。こうした前提に立って解決に努力すれば、実りある結果が得られると考えている。

なお、アファナシエフ氏のような意見は、それはそれであつてもよいのではないのか。いまのソ連は意見のブルラリズム（多元主義）の時代だから、だれがどんな意見を出してもよい。ただ、あくまでアファナシエフ個人の意見であつて、他に違った意見の人々もいる。

中嶋 では、アファナシエフ発言はソ連の政策決定にほとんど響いていない、と見てよいのですか。

サルキーソフ これまでは、ソ連人が何か言うと、それがソ連政府や共産党の意見と受け止められてきた。だが、いま

エフ氏は議会のグループの代表としてあつた発言をしたのではない。そう解釈したとしたら、それは間違いだ。確かにいま、われわれの議会は機能している。そこで仮説的に言えば、政府がアファナシエフ提案のものを議会に出してきたら、議会を通ることなど考えられない。

◆ソ連政治の変貌

小島 そこで先ほどから言っていることなのだが、私のモスクワ特派員の経験では、ソ連で歴史的な見直しが行われているにもかかわらず、日ソ間には北方領土という問題があるのだ——ということが、国民の間でまだ正しく理解されていない。ソ連側がこの問題でもっと努力する必要があるのではないか。

ペトロフ うーん、でもね、アファナシエフ氏の見解が、彼が議長をつとめるグループを代表しているとは私には認められない。このグループはみんな急進的な考え方の人たちが、北方領土問題に関してはずい分と見方を異にしているからだ。

小島 それは私も知っています。例えば、同じ共同議長の人であるサハロフ博士と、アフアナシエフ氏の立場は全く違うから。

サルキースフ ともかく、アフアナシエフ氏は自分の個人的見解を述べたのであって、決して公式の立場からのものではなかった。私が非常に遺憾とし、アフアナシエフ氏を気の毒だと思っているのは、この発言がソ連のマスコミでも大々的に取りあげられ、強く批判され、処罰せよ、などといわれたことだ。自分の個人的信念を述べてこういう扱いを受けるのは、グラスノスチに反している。

中嶋 私は昨年十一月に一年ぶりにソ連に行つて、ベレストロイカが経済改革の分野にはまだ及んでいない、いや、まったく効果がないのではないかと疑いたくなった反面で、ソ連の人たちの物の考え方はものすごく変わってきている、と実感した。北方領土問題では、日本にも四島一括返還から二島返還論、返還無用論などいろいろな意見があるが、こうして見ると、ようやく日本もソ連もこの

問題で自由に論議できる場ができた、ということだろう。これは非常に大きな意義がある。これを今後どうやって外交交渉に結びつけていくかだ。

◆議長訪日と日本

小島 まあ、いろいろ議論をしてきたが、一つ指摘しておきたいのは、ソ連の北方領土に対する公式的立場はまったく変わっていない、ということだ。グロムイコ書簡が無効だとも言っていないし、二島返還論も公式的にはまったく認めていない。そこで、九一年にはゴルバチョフ議長の訪日が予定されているが、この訪日で、ソ連のこの問題に対する公式的立場に変化が生まれるのか、日ソ関係に劇的な変化をもたらすような新提案が出されるのか。個人的見解で結構だから、予測していただけないか。

ペトロフ 小島さんはいま、ソ連の公式的立場は変わっていない、と言われたが、そんなことはないと思う。何故なら、ソ連はかつて、グロムイコの時代には、北方領土という問題は存在しないとずっ

と言いつけてきたが、いまではこの問題が存在していることを認めている。第二に、ソ連はこれまで、この問題で議論することを一貫して拒否してきたが、いまでは日本の立場、主張を理解し、討論しようとしている。そして第三に、こうした討論の必要性を認めているだけでなく、討論するための三つのレベルの、つまり専門家レベル、外務次官レベル、外相レベルの特別機構もつくっている。ソ連は北方領土問題をなんとか解決したい、という姿勢をはっきり示しているの

で、これは重要なことだ。

これに対し、日本政府の姿勢にはまったく前進がない、と言ってよいのではないかと。ともかく四島を返せ、ということが変わっていない。私たちはそうした日本の立場もよく理解しているが、問題解決には双方の側からの前進が必要ではないだろうか。どこで折れ合うのか、半々なのか、それともソ連が六割を譲るのか、それは交渉の問題だが、最初から一〇〇％自分の目的を達成しようというのでは、話し合いにならないと思う。

サルキースフ ゴルバチョフ訪日の結果を予測するなど、とても困難だ。一つだけ明らかなことは、訪日までのこれからの一年余は非常に重要だ、ということだろう。日ソの作業グループがいまその準備をしているが、双方の立場がぶつかり合つて、余り実りはないという話だ。だから、私は作業グループも大切だが、もっと上のレベルの政治的な折衝があれば、立場も接近し、新しいアプローチが見つかるとはならないか、と考えている。

それから、ゴルバチョフ議長が訪日したからといって、北方四島を返還することには必ずしもならないし、そんなことはありえない、空想に過ぎない、とも思う。最近の日本の週刊誌などを見ていると、ゴルバチョフ議長がこれら島々を譲りにくる、とか、売りにくる、とか書いているが、そんなことは絶対ウソだと思つていい。とくに「売る」などということとは、いわば売国であり、国民感情にかかわる問題だから、私は大反対です。一銭ももらわなくとも問題に決着がつけば、それが一番価値あることだ。

ゴルバチョフ議長の訪日で、北方領土問題でお互いが合意に達したレベルで、今後の日ソ関係の新しい位置づけ、というか、方程式のようなものができれば、それで非常に大きな前進ということができ、と考えている。

中嶋 北方領土問題というのは、二十世紀に日ソ間に生じた問題であり、二十世紀のうちにぜひ解決しなければならぬ、と思う。ゴルバチョフ議長の訪日ですべてが決着するには、条件が熟していないが、これを契機にこの問題の本格的な解決策を日ソ双方が探らなければならぬ。その機は熟していると考えている。

小島 中嶋先生はゴルバチョフ訪日の際、日本側が北方領土問題で何か新しいアプローチを出す、とお考えですか。

中嶋 日本側から出すのは難しいでしょうね。だから、ソ連側が出てきたものに日本側がどう対応していくか、ということ、日本側が決断を迫られることになりそう。

サルキースフ 最後に、先ほどペトロフさんが言われたことの繰り返しになる

が、念を押しておきたい。それは、ゴルバチョフ訪日で日本側が北方領土問題でまったく譲歩はしない、新しいアプローチは打ち出さないとすれば、ソ連側が一方的に譲歩、ないしアプローチを打ち出すことはありえないし、よくないことだと思つていい。

ペトロフ 私にもひとつつけ加えてほしい。ゴルバチョフ議長は日本に観光旅行にくるわけではない。だから、議長訪日に先立つて、双方が訪問の結果について真剣にいろいろ考えなければならぬし、文書などもあらかじめ準備しなければならぬ。そうでなければ、ゴルバチョフ訪日の意味もなくなつてしまう。そこで、私は、日ソ双方が北方領土問題を含め、あらゆる面で両国が関係をどう発展させるべきか考えるべきだ、と思つている。北方領土というせまい問題だけでなく、もっと広範な、グローバルな国際関係の発展という立場から話し合うべきだと考えている。

小島 率直なご意見をありがとうございます。